

娘子をとめ、臥ふしつづ、夫君つまの歌うたを聞きき、枕まくらより
頭かしらを上げ、声こゑに応こたへて和こたふる歌うた一首

三八〇五番

ぬばたまの 黒髪くろかみ濡ぬれて 沫雪あわゆきの 降ふるにや来きま
す ここだ恋こふれば

三八〇六番

事ことしあらば 小泊瀬山をばつせやまの 石城いはきにも 隠こもらば共ともに
な思おもひ我わが背せ

右みぎ、伝つたへて云いはく、時ときに女子をみなこあり、父母ちちははに
知しらせず、ひそかに壮士むさしに接まじる。壮士むさしその
親おやの呵こ嘖ろはむことを悚おそ惕そりて、稍やぐやくに猶さら予も
ふ意いあり。これに困よりて、娘子をとめこの歌うたを裁つ
作りて、その夫つまに贈おくり与あたふ、といふ。